「相中相高百年史」より
（昭和初期の相馬中学校　５）

５　軍事教練

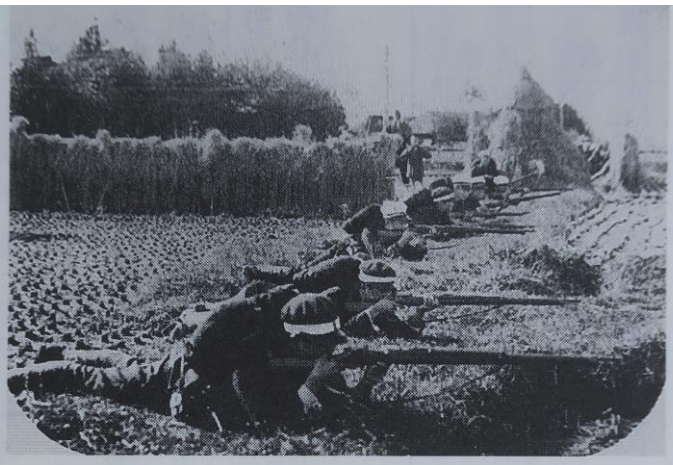
軍事教練は週一、二回行われ、クラス毎に団体行軍や、銃の操作などの訓練があり、発火演習と称して、四、五年生が一泊民宿で大野方面や原町方面で空砲を撃つ野戦訓練も時々行われたし、寒稽古も柔道か剣道のどちらか一つを選び、通学できる範囲の者は全員参加させられたのである。

……

教育会への指令も日を追って激しくなっていった。野外演習や発火演習が大々的に展開され、第二九連隊長の教練査閲も定期的に実施された。野外演習は四、五年生に適用され、全員二日間で大野、鹿島、原町方面での訓練であり、また、会津へ遠征して若松二九連隊の見学も行われた。兵営生活は三泊四日で行われ、一般軍隊の概念を肌で感じさせようとするものであった。

軍国主義が強くなると、配属将校の権力は校長をも揺るがすほどになった。以前はそれ程ではなかったが、当時は学力より軍事教練の方がウェイトが大きく評価された時代になっていた。

年に一度の連隊長査閲が近づくと、学校内の清掃や銃器の点検などが綿密に行われ、校長はじめ、各教諭も一人一人の生徒の服装のささいな点まで注意し、学校全体が異常な緊張感に包まれた。



模擬戦闘訓練の一風景

←若松二九連隊長の教練査閲

当時の生徒は、査閲官に頭の先から足の先までジロリと見られると、コチコチになって身の縮む思いがしたという。軍事教練の成績が「甲」でないと士官学校へ進めなかったこともあり、生徒達の教練に対する熱の入れようは大変なものであった。

1931（昭６）年８月に発表された県立各中学校の保有銃器数一覧表でみると、本校の銃器割当ては百挺で、これらの軍用銃は専ら三年生以上に渡された。一年生は徒手訓練、二年生は木銃で小隊訓練であった。

しかし、たとえ木銃であるにせよ、これらの銃を肩にしての「戦争ごっこ」はだんだん激化する一方で、時には宮城県白石市までの 60 キロ行軍なども行われたのである。

原町市や小高町までの銃をかついでの行軍や、さらに稲刈りの終った田んぼでの模擬戦闘訓練の発火演習などでは、「お国のため」という滅私奉公の精神訓話をたたき込まれながらの教練だった。

60 キロ行軍の記念撮影（白石市郊外にて）

↑「相中相高八十年」写真より

（1 月 28 日　選択転記　村山）